

令和元年度

学校評価（年度末評価）結果報告書

令和2年3月17日

広島県立賀茂高等学校 全日制

# 目 次

- 1 自己評価シート（年度末評価）様式5 . . . . . 1
- 2 自己評価シート（年度末評価まとめ）様式6 . . . . . 6
- 3 学校関係者評価シート（年度末評価）様式8 . . . . . 8

令和元年度自己評価シート(年度末評価)

校番	24	学校名	賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	③定・通	①本・分
----	----	-----	--------	------	-------	------	------

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
1 学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる。							
「活用と協働」を取り入れた学びが機能している。	「活用・アウトプットを取り入れた授業」により、課題や疑問を見つけ、積極的に質問するなどして前向きに授業に取り組んでいる。 (%, 生徒アンケート)	91.0	90	93.2	A	組織的な授業改善の推進により、授業における「活用場面」に生徒も慣れ、積極的な学習活動が行えるようになったため。	教務
	授業での協働の場面（ペアワーク等）によって、学習内容の理解が深まっている。(%, 生徒アンケート)	92.2	90	92.3	A	授業でのコミュニケーションが豊かになり、ペアやグループで学び合うことによる理解の深化を生徒が実感したため。	
グローバル社会を見据えたキャリア教育を展開している。	GAP(グローバル・アクション・プログラム)により、多様な視点から社会を分析することで、課題の解決に向けた提案ができる。 (%, 生徒アンケート)	89.0	90	98.0	A	GAPの年度末生徒アンケートの結果、98.0%の生徒から肯定的評価を得ることができた。	2学年会
	国際交流の機会を、異文化に目を向ける契機とし、グローバルな視点から自分の考えを発信できる。 (%, 生徒アンケート)	91.0	90.0	47.0	C	国際交流の機会が異文化の理解に繋がっているが(生徒アンケート88%)、自分の考えを積極的に発信できたと考える生徒は半数に満たなかったため。	1学年会

【評価結果の分析】

- ・カリマネ研修、授業研究、互見授業等の取組の成果として、目標値を達成することができた。
- ・探究活動の在り方(流れ)を十分に理解させ、目標を明確にし、常に目標を確認しながら進めた結果であると考えられる。
- ・広島大学大学院留学生との交流では、参加してもらった留学生が直前まで確定せず、事前準備を活かしきることができなかった。韓国姉妹校交流においては、姉妹校のプレゼンテーションに圧倒され、生徒の自己評価が低くなった。

【今後の改善方策】

- ・2学期は1学期に比べて、肯定的評価が約5%下がっている。生徒自身の「活用」の在り方への理想が高まったことが要因として考えられる。授業内容の創意工夫に努める必要がある。
- ・1・2学期の肯定的評価は、それほど大きな違いは無い。協働学習に関する基本的な教育理論等については、さらに学校全体で共有に努める必要がある。
- ・次年度からは「総合的な探究の時間」になるため、この部分は省略する。
- ・発信する自らの考えを持つために、教養としての知識を増やす必要がある。様々な話題に触れさせ、関心ごとを広げることが有効であるため、引き続き朝のコラム学習を継続する。また、総合的な探究の時間は各教科とのつながりを更に意識しながら展開していく。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			

2 挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動が取れる生徒を育てる。

国公立大学及び地元の中核大学である広島大学への合格者数を増やす。	卒業者数に対する国公立大学合格者数の割合(%)	34	40	30	C	現時点でAO・推薦入試合格者が6名、出願予定者は、前期134名・中期41名、後期110名であった。	3学年会 進路指導
	広島大学合格者数(人)	10	20	7~10	C	広島大学希望者の数は昨年並みだが、現時点でAO入試合格者が1名、出願数は前期が18名・後期が4名である。	進路指導
学力向上と部活動との両立ができています。	“模試平均偏差値が1学年では52を、2学年では50を超えている。 (国数英平均の数値)	1学年 49.9 2学年 51.2	1学年 52 2学年 52	1学年 49.5 2学年 48.9	C	(1年)7月47.6、11月48.4となり、目標値を達成できなかった。(2年)2年は7月49.8、11月49.3となり、目標値が到達できなかった。	進路指導
	センター試験において、受験者の40%が全国平均点を超えている科目(数)	10	10	8	B	19科目中、国語、現代社会、倫理、政治経済、化学基礎、生物基礎、地学基礎、生物の8科目が40%を超えた。	
	“1、2年生は平均150分以上、3年生は平均210分以上、授業以外の自主的な学習ができています。	1学年 170	1学年 150	108	C	目標値を42分下回ったから。	
		2学年 151	2学年 150	151	A	目標値を1分上回ったから。	
		3学年 231	3学年 210	240	A	目標値を30分以上上回ったから。	
	部活動で学んだことが、自分の学習活動に良い影響を与えている。 (%, 生徒アンケート)	86.7	90	85.2	C	“3年生のみ目標値に対して上回っているが、全体で目標値を下回ったため。(1年83.1% 2年80.9% 3年91.6%)”	特別活動
GTEC for Studentsのトータルスコア平均(数値)	1学年 425/660 2学年 458/810	1学年 600/1080 2学年 700/1280	1学年 719/1080 2学年 810/1280	A	1・2学年共に本年度目標値を上回ったが、全国平均を見ると、2学年が全国平均(771)プラス39ポイントあるのに対して、1学年は全国平均(722)マイナス3ポイントであった。	英語科	

【評価結果の分析】

- ・センター試験の全国平均点が下がり、得点500点以上の生徒が昨年の111名から89名に減少している。
- ・センター試験の全国平均点が下がり、得点率70%以上の生徒が15名で昨年比マイナス8名である。ドッキング判定でA判定1名、B判定5名、C判定7名と厳しい判定である。
- ・1年は、クラスが1クラス増となり、7月記述が過去にない低い値であったが、昨年度並みに持ち直した。数学が50.9だが、国・英の巻き返しを期待される。(2年)国語は偏差値が50.6であったが、数学46.9と大幅に下げている。早急な対策を実施し、巻き返しに期待したい。
- ・4年連続、センター試験を全員受験した。実績値も目標値に近いもの出すことができた。
- ・まじめな生徒が多く、与えられた課題を消化することはできています。ただし、課題をこなすことが目的となっていて学力が追いついていないのが現状である。
- ・家庭学習の内訳はおよそ数学4割、英語3割となっている。定期考査前、課題提出の曜日に学習時間が偏ったり、クラスによって偏ったりしている。
- ・昨年度の3年生と比較し、学習時間の少なさが指摘されていたが、記録シートに書いた内容を生徒と担任が共有し指導に活かすことによって昨年度の3年生以上の学習時間を確保した。教科担当者とも学年団の中では共有できたが、学年間での共有するための方法が確立してい

ない。

- ・3年生については毎年非常に高い値である。最後まで部活動をやりきったことで様々なことを学び、学習への挑戦・努力や頑張る姿勢につながっていると考える。
- ・1年生の4技能トータルの平均値(718.6)は、全国平均値(722)を3.4ポイント下回った。アウトプット(書く・話す)では全国平均を上回ったが、インプット(読む・聞く)で全国平均を下回った。  
2学年は、インプット(読む・聞く)については全国平均とほぼ同じくらいだったが、アウトプット(書く・話す)で全国平均を大きく上回ったため、トータルで全国平均を上回ることができた。

【今後の改善方策】

- ・AO・推薦入試には、適性を見極めをしたうえで可能性のある生徒に挑戦させる。小論文・面接指導担当者を全教科に割り当て、きめ細かな指導を実施していく。共通学力テスト対策と二次対策を各教科・科目で実施する。
- ・AO・推薦入試には、適性を見極めをしたうえで可能性のある生徒を挑戦させる。小論文・面接指導担当者を全教科に割り当て、きめ細かな指導を実施していく。共通学力テストや2次の力をつけることができるよう教員が出来るだけ問題を多く解いた上で、指導できるようにしなければならない。
- ・模試の振り返りをデジタルサービスで行うように促している。目標設定もさせることで、PDCAサイクルの構築を目指す。
- ・500点以上の生徒は一昨年73名、昨年111名から89名と推移している(900点満点)。3月の最後まで粘り強く自分の進路決定に取り組ませる指導が今後も必要である。
- ・ベネッセが提供するICTプラットフォームを導入し、自らが自主的に学習時間の管理や学びの振り返りができる環境を整えているが、学習時間の入力が滞る生徒が多く出て、事後指導に時間を割かれている。今後タブレットの導入されれば、朝のSHRで入力させることが可能となるだろう。
- ・時間を守る・集中する・自分を鍛える・仲間を大切にするなどのことを徹底して指導する。各部で横のつながりを作り互いがいい刺激を与え合えるような雰囲気をつくる。顧問と部員、さらには担任との連携を密にし、(学習面・生活面など)何事もやりきるという経験をさせる。
- ・「英語表現Ⅰ・Ⅱ」では、本年度に倣い、文法・語法・構文等の知識の定着を図るとともに、「書くこと」を中心にエッセイライティングを継続的に行うことにより、アウトプットの力を伸ばす。  
「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、インプットでリーディング・リスニングスキルの習得、インテイクで題材文を精読して自分に引き寄せて思考、アウトプットではリテリングや発表、やりとり等のスピーキングをゴールイメージにもって行うことにより、インプットにとどまらないような授業づくりに努める。また、すべての科目において言語活動の基盤となる語彙力・基礎的な英文法力を伸ばすための小テストを計画的・継続的に行う。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
3 貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる。							
1人1リーダー制が機能し、他者を認め、貢献することができる。	1人1役制で自分が人のために役に立とうと考えながら様々な活動や行事に参加できた。(%, 生徒アンケート)	82.7	85	85.1	A	85%以上の生徒が人のために役に立とうという気概で委員会等さまざまな行事に積極的に参加できた。(1年85.1% 2年86.1% 3年77.7%)	特別活動
	挨拶をする習慣が身に付いている。(%, 生徒アンケート)	95.0	100	89.7	C	昨年度と比べて、5.3%減少しているが、笑顔で挨拶する生徒が増えたという実感から左記の評価とした。	生徒指導
	美化委員による清掃点検(年5回以上)の評価において、よく清掃ができています。(平均%)	90.3	90	91.6	B	1回目は84.4%、2回目は90.6%、3回目は96.9%であった。目標値を少し上回っており、回を重ねる度に数値が向上しているため。ただし、3学期に予定していた点検は、臨時休校措置のため実施していない。	環境保健

【評価結果の分析】

- ・生徒会理事を中心に様々な行事にクラス役員や部活動の部長がまとめ役となり、各生徒がクラスのため、学校のためにという気持ちで取り組むことができたのではないかと考えている。
- ・昨年度と比較し、1年生が97.9%から85.8%、3年生が93.9%から89.1に減少した。一方2年生は91.4%から94.8%に増加した。このことから、1年生の落ち込みが大きいことと、平成30年度入学生の意識が高いことが分かる。
- ・美化委員による点検なので、基準がやや甘くなったかもしれない。とはいえ、行事前の大掃除は、毎回全校生徒が分担して丁寧に掃除しており、大部分は平素より仕上がりがよい。

【今後の改善方策】

- ・より良い学校生活や行事を求め、どのようにすればよいかを生徒に考えさせる機会を多くする。生徒たちが学校の主役であることを自覚させるために、生徒会理事を中心に各種委員会・部長会などを互いに意見を出しあえる場としたい。また、人のために役に立とうとする行動には教員・生徒同士でも称賛し合える雰囲気をつくる。
- ・今後も、集会等で講話を継続することに加え、学年主任や担任、授業担当者、部活動顧問等、あらゆる場所、あらゆる機会をとらえて、学校全体で取り組む必要がある。
- ・平素の掃除の徹底を図るため、点検方法を含め新たな手立てを検討する。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当部等
		実績値	目標値	実績値			
4 広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする。							
保護者や地域社会に対して、積極的に情報を発信する。	ホームページのアクセス数 (回数/1ヶ月当たり)	4,540	4,000	4,024	A	2/27時点で目標値のアクセス数を越えている。入学選抜、休校期間の諸連絡に伴い3月にアクセスの増加が見込めるため。	総務
	ホームページの更新回数 (回)	178	170	201	A	「校長 eyes」更新が継続的に行われるとともに、部活動、諸行事の報告も更新を重ね、目標値を大きく上回ったため。	
中学生へ効果的なアピールを行う。	オープンスクールへの参加者数(人)	559	600	532	B	実参加者数が昨年より27名減少しており、目標値を下回ったが、アンケートによると在校生による進行や案内は高い評価を得ており、中学生に対し有効なアピールとなったと考えられるため。	総務
	賀茂高だよりの定期発刊 (増刊号を含む)(回)	7	8	8	A	2月末日までに、地域向け増刊号2回を含む8回の発行を終えたため。	

【評価結果の分析】

- ・今年度も「校長 eyes」等の更新が頻繁に、継続的に行われることによって、アクセス数が目標値を越えたと考えられる。
- ・近隣の中学3年生の人数の減少が影響していると考えられる。
- ・順調なペースで刊行できており、タイムリーな話題の速報としての機能も果たしている。

【今後の改善方策】

- ・今年度の更新回数を維持し、よりタイムリーな更新を実現するため、校務上、専任者を置くことが望まれる。
- ・案内を送付するエリアを広げ、より多くの中学からの参加を呼びかける。生徒会、部活動の参加体勢を早期に確立するとともに、在校生との座談の場を設けるなど、生徒による中学生へのアピールを強化する方策を考える。
- ・今年度の刊行ペースを維持し、遅滞がないようにすすめて行く。

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度	本年度		評価	理由	担当 部等
		実績値	目標値	実績値			
5 教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する。							
教育相談体制の充実を図る。	本校には教育相談の窓口が設置され、相談体制が充実していると思う。 (%, 学校評価アンケート)	62	80	60	B	目標値を下回っているが、否定的な回答はごく少数であったため。数値の低さは「わからない」という回答が多かったことによる。また、利用した生徒のアンケートでは、「気持ちの整理につながった」という肯定的回答が86%だったことも評価に加味した。	環境 保健 生徒 指導
職員の働き方改革を推進する。	業務改善の取組を学校全体で取り組んでいる。 (%, 職員アンケート)	63	70	31	D	職員アンケートの結果から、目標値に達していないどころか、昨年度の半分以下のデータとなっている。	各部 主任 管理 職

#### 【評価結果の分析】

- ・新任のSCを全校集会で紹介するなどいろいろな方法で不安や悩みがあれば相談するようよびかけたことにより、校内に「教育相談」の機会が設けられていることを多くの生徒に周知することができた。
- ・子供と向き合う時間が十分に確保できていないと感じている教職員の理由の大半は授業準備や個別指導となっている。業務改善の目的や推進体制に対する具体的な説明を十分に行う必要がある。

#### 【今後の改善方策】

- ・「わからない」という回答が250人以上(35%)いる。これは「機会があることは知っているが充実しているかどうかはわからない」という認識だと考えられる。教育相談を利用したことのない生徒にも答えやすい設問を工夫したい。
- ・教職員研修などを利用して、業務改善の目的や、具体的な提案等を行う。達成目標については、時間外の勤務時間が80時間以上の教職員を0にするなど、評価指標の変更についても検討する必要がある。

## 令和元年度自己評価シート（年度末評価まとめ）

校番	24	学校名	広島県立賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	全日制	本校
----	----	-----	------------	------	-------	-----	----

## 1 評価結果の分析

(1) 学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる。

- ・カリマネ研修，授業研究，互見授業等の取組の成果として，目標値を達成することができた。
- ・探究活動の在り方(流れ)を十分に理解させ，目標を明確にし，常に目標を確認しながら進めた結果であると考えられる。
- ・広島大学大学院留学生との交流では，参加してもらった留学生が直前まで確定せず，事前準備を活かしきることができなかった。韓国姉妹校交流においては，姉妹校のプレゼンテーションに圧倒され，生徒の自己評価が低くなった。

(2) 挑む：高い目標を持ち，それに向けて自律した行動がとれる生徒を育てる。

- ・センター試験の全国平均点が下がり，得点 500 点以上の生徒が昨年の 111 名から 89 名に減少している。
- ・センター試験の全国平均点が下がり，得点率 70%以上の生徒が 15 名で昨年比マイナス 8 名である。ドッキング判定で A 判定 1 名，B 判定 5 名，C 判定 7 名と厳しい判定である。
- ・1 年は，クラスが 1 クラス増となり，7 月記述が過去にない低い値であったが，昨年度並みに持ち直した。数学が 50.9 だが，国・英の巻き返しが期待される。(2 年)国語は偏差値が 50.6 であったが，数学 46.9 と大幅に下げている。早急な対策を実施し，巻き返しに期待したい。
- ・4 年連続，センター試験を全員受験した。実績値も目標値に近いもの出すことができた。
- ・まじめな生徒が多く，与えられた課題を消化することはできている。ただし，課題をこなすことが目的となっていて学力が追いついていないのが現状である。
- ・家庭学習の内訳はおおよそ数学 4 割，英語 3 割となっている。定期考査前，課題提出の曜日に学習時間が偏ったり，クラスによって偏ったりしている。
- ・昨年度の 3 年生と比較し，学習時間の少なさが指摘されていたが，記録シートに書いた内容を生徒と担任が共有し指導に活かすことによって昨年度の 3 年生以上の学習時間を確保した。教科担当者とも学年団の中では共有できたが，学年間での共有するための方法が確立していない。
- ・3 年生については毎年非常に高い値である。最後まで部活動をやりきったことで様々なことを学び，学習への挑戦・努力や頑張る姿勢につながっていると考えられる。
- ・1 年生の 4 技能トータルの平均値 (718.6) は，全国平均値 (722) を 3.4 ポイント下回った。アウトプット (書く・話す) では全国平均を上回ったが，インプット (読む・聞く) で全国平均を下回った。2 学年は，インプット (読む・聞く) については全国平均とほぼ同じくらいだったが，アウトプット (書く・話す) で全国平均を大きく上回ったため，トータルで全国平均を上回ることができた。

(3) 貢献する：規範意識が高く，他者を思いやり貢献する生徒を育てる。

- ・生徒会理事を中心に様々な行事にクラス役員や部活動の部長がまとめ役となり，各生徒がクラスのため，学校のためという気持ちで取り組むことができたのではないかと考えている。
- ・昨年度と比較し，1 年生が 97.9%から 85.8%，3 年生が 93.9%から 89.1 に減少した。一方 2 年生は 91.4%から 94.8% に増加した。このことから，1 年生の落ち込みが大きいことと，平成 30 年度入学生の意識が高いことが分かる。
- ・美化委員による点検なので，基準がやや甘くなったかもしれない。とはいえ，行事前の大掃除は，毎回全校生徒が分担して丁寧に掃除しており，大部分は平素より仕上がりがよい。

(4) 広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め，誇りが持てる学校にする。

- ・今年度も「校長 eyes」等の更新が頻繁に，継続的に行われることによって，アクセス数が目標値を越えたと考えられる。
- ・近隣の中学 3 年生の人数の減少が影響していると考えられる。
- ・順調なペースで刊行できており，タイムリーな話題の速報としての機能も果たしている。

(5) 教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する。

- ・新任の S C を全校集会で紹介するなどいろいろな方法で不安や悩みがあれば相談するようよびかけたことにより，校内に「教育相談」の機会が設けられていることを多くの生徒に周知することができた。
- ・子供と向き合う時間が十分に確保できていないと感じている教職員の理由の大半は授業準備や個別指導となっている。



## 2 今後の改善方策

(1) 学ぶ：生涯にわたり学び成長する「優れた学習者」を育てる。

- ・2学期は1学期に比べて、肯定的評価が約5%下がっている。生徒自身の「活用」の在り方への理想が高まったことが要因として考えられる。授業内容の創意工夫に努める必要がある。
- ・1・2学期の肯定的評価は、それほど大きな違いは無い。協働学習に関する基本的な教育理論等については、さらに学校全体で共有に努める必要がある。
- ・次年度からは「総合的な探究の時間」になるため、この部分は省略する。
- ・発信する自らの考えを持つために、教養としての知識を増やす必要がある。様々な話題に触れさせ、関心ごとを広げることが有効であるため、引き続き朝のコラム学習を継続する。また、総合的な探究の時間は各教科とのつながりを更に意識しながら展開していく。また、総合的な探究の時間は各教科とのつながりを更に意識しながら展開していく。

(2) 挑む：高い目標を持ち、それに向けて自律した行動がとれる生徒を育てる。

- ・AO・推薦入試には、適性を見極めをしたうえで可能性のある生徒に挑戦させる。小論文・面接指導担当者を全教科に割り当て、きめ細かな指導を実施していく。共通学力テスト対策と二次対策を各教科・科目で実施する。
- ・AO・推薦入試には、適性を見極めをしたうえで可能性のある生徒を挑戦させる。小論文・面接指導担当者を全教科に割り当て、きめ細かな指導を実施していく。共通学力テストや2次の力をつけることができるよう教員が出来るだけ問題を多く解いた上で、指導できるようにしなければならない。
- ・模試の振り返りをデジタルサービスで行うように促している。目標設定もさせることで、PDCAサイクルの構築を目指す。
- ・500点以上の生徒は一昨年73名、昨年111名から89名と推移している(900点満点)。3月の最後まで粘り強く自分の進路決定に取り組ませる指導が今後も必要である。
- ・ベネッセが提供するICTプラットフォームを導入し、自らが自主的に学習時間の管理や学びの振り返りができる環境を整えているが、学習時間の入力に滞る生徒が多く出て、事後指導に時間を割かれている。今後タブレットの導入されれば、朝のSHRで入力させることが可能となるだろう。
- ・時間を守る・集中する・自分を鍛える・仲間を大切にすることなどを徹底して指導する。各部で横のつながりを作り互いがいい刺激を与え合えるような雰囲気をつくる。顧問と部員、さらには担任との連携を密にし、(学習面・生活面など)何事もやりきるという経験をさせる。
- ・「英語表現Ⅰ・Ⅱ」では、本年度に倣い、文法・語法・構文等の知識の定着を図るとともに、「書くこと」を中心にエッセイライティングを継続的に行うことにより、アウトプットの力を伸ばす。  
「コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」では、インプットでリーディング・リスニングスキルの習得、インテイクで題材文を精読して自分に引き寄せて思考、アウトプットではリテリングや発表、やりとり等のスピーキングをゴールイメージにもって行うことにより、インプットにとどまらないような授業づくりに努める。また、すべての科目において言語活動の基盤となる語彙力・基礎的な英文法力を伸ばすための小テストを計画的・継続的に行う。

(3) 貢献する：規範意識が高く、他者を思いやり貢献する生徒を育てる。

- ・より良い学校生活や行事を求め、どのようにすればよいかを生徒に考えさせる機会を多くする。生徒たちが学校の主役であることを自覚させるために、生徒会理事を中心に各種委員会・部長会などを互いに意見を出しあえる場としたい。また、人のために役に立とうとする行動には教員・生徒同士でも称賛し合える雰囲気をつくる。
- ・今後も、集会等で講話を継続することに加え、学年主任や担任、授業担当者、部活動顧問等、あらゆる場所、あらゆる機会をとらえて、学校全体で取り組む必要がある。
- ・平素の掃除の徹底を図るため、点検方法を含め新たな手立てを検討する。

(4) 広報活動を充実する：保護者・地域の信頼と期待を高め、誇りが持てる学校にする。

- ・今年度の更新回数を維持し、よりタイムリーな更新を実現するため、校務上、専任者を置くことが望まれる。
- ・案内を送付するエリアを広げ、より多くの中学からの参加を呼びかける。生徒会、部活動の参加体勢を早期に確立するとともに、在校生との座談の場を設けるなど、生徒による中学生へのアピールを強化する方策を考える。
- ・今年度の刊行ペースを維持し、遅滞がないようにすすめて行く。

(5) 教育環境を充実する：生徒が安心できる校内環境の整備と働き方改革を踏まえた業務改善を推進する。

- ・「わからない」という回答が250人以上(35%)いる。これは「機会があることは知っているが充実しているかどうかはわからない」という認識だと考えられる。教育相談を利用したことの無い生徒にも答えやすい設問を工夫したい。
- ・教職員研修などを利用して、業務改善の目的や、具体的な提案等を行う。達成目標については、時間外の勤務時間が80時間以上の教職員を0にするなど、評価指標の変更についても検討する必要がある。

## 令和元年度学校関係者評価シート(年度末評価)

平成 2年 3月 24日

校番	024	学校名	広島県立賀茂高等学校	校長氏名	大石 秀邦	全日制	本校
----	-----	-----	------------	------	-------	-----	----

評価項目	評価	理由・意見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	<p>次年度からは、新たな達成目標などが設定されると思われるが、それぞれの学校経営目標について、これまでの数値目標を継続しつつ、「意欲」の面についても設定を検討することで、より精緻化できると思われる。具体的には、例えば、「1 学ぶ:生涯にわたり学び成長する・」では、評価指標が4項目設定されているが、その評価項目が目標値に到達すれば、生徒が「生涯にわたり学び成長する優れた学習者」になるかの吟味も必要である。生涯にわたり学び成長するためには、学習を「楽しい」と感じたり、成長を「実感」できたりしないと、学び続けることが難しい。現在の評価指標を「達成しようとするエネルギー」、つまり意欲の部分についても、検討すること。</p> <p>達成目標および行動計画ともに具体的であり適切だが、目標値については、一部生徒の実態に合っていない部分が見られた。</p>
目標の達成状況の評価の適切さ	B	<p>令和元年度自己評価シート(年度末評価)より、いずれの項目においても数値を中心としたエビデンスをもとに適切に評価がされている。目標値に対する実績値を数値化するなど基準が明確であるとさらに分かり易い。ただし、アンケート項目によっては、回答者の意識の違いにより相当の開きが生じるため、20パーセント以上の幅でとらえる必要がある。数値で示されると説得力があるように錯覚を起こす危険性があるということを認識しておくこと。</p>
目標達成に向けた取組の適切さ	A	<p>令和元年度自己評価シート(年度末評価)より、評価指標を校内で共有し、担当部署を中心に学校全体で取り組みが進められていることが読み取れる。結果の分析欄に1年間の多くの取り組みが記されており、具体的な実践の跡がうかがえる。</p>
評価結果の分析の適切さ	A	<p>令和元年度自己評価シート(年度末評価)をもとに、生徒の実態に対応した原因分析が記述されている。学校運営協議会で話題になった「3 貢献する」の挨拶の習慣の評価について、評価理由が「笑顔で挨拶する生徒が増えたという実感から・・」は、重要な視点だと思う。数値は経年で上下するが、最も大切なのは、毎日生徒と接している先生方の「肌感覚」と考える。数値の変動も大切だが、これからは先生方の「感覚」を大切に、その「裏付け」として数値を活用すること。地元中学校から海田高校へ志願するという話を地元住民からよく耳にする。地区外への志願者流出が増加傾向にある要因を分析する必要がある。</p>
今後の改善方策の適切さ	A	<p>分析結果に対する改善策をもう少し精緻化した表現にすること。例えば、「1 学ぶ」の「グローバルな視点から自分の考えを発信できる」において、分析は「圧倒され」とあるが、方策として知識を増やせば改善できるか疑問を感じる。生徒実態として、教養不足の他に、自信がない、積極性がない、表現スキルがっていない、意見に対して反論する思考力が弱い、必要性を感じない、など、いくつか要因が考えられる。もう一步踏み込んだ説明が必要である。普通科高校としての特色を明確にしていくことが急務であると思われる。進学実績で評価されることは避けて通れないため、学力向上のための具体的手立てが示されていることは良い。</p>
総合評価	A	<p>総合評価として、数値目標を掲げ、取り組みの状況が客観的に評価され、十分に説得力のある取り組みが全校で進んでいる。生徒のアンケート結果や、この学校評価について、学校の主体者である生徒と共有できると(特に肯定的項目について)、さらに生徒を巻き込んだ取り組みになる。3か年の計画ということで、年度当初の目標値が設定されているが、項目によっては前年度の実態を考慮すべきものもある。教職員の働き方改革にも関係するが、部活動が生徒の学校生活の充実に繋がっていることは周知のとおりである。望ましい部活動の在り方について創意工夫が求められる。概ね取り組みや評価は妥当であるが、生徒のやる気を出させる方法や積極性を出させることなど、人間性を伸ばす基本的な心の勉強を指導し、社会に出ても困らないような取り組みも必要である。</p>